

ウ エ レ ク

## 『批評の概念』

René Wellek : Concepts of Criticism.  
New Haven and London, Yale  
University Press. 1963. 403 p.

体系化を意図し、文学作品への intrinsic approach の正当性を論証した点で、単に文学理論の英語圏内での成果であるばかりでなく、広く世界的性格をもつものであった。しかしながら、ウエレク自身も語っているように、『文学の理論』にこめられた著者の意図が充分理解されたとは言いがたい。たとえば、たしかに伝記的要素、社会的状況、歴史的諸

ルネ・ウエレクがウオレンと共に著した『文学の理論』は文芸学の現代的様相、あるいは戦後における文芸学の出発点を指し示すものとしてわれわれにとって基本的な文献の一つに数えられている。それはロシア形式主義の東欧的展開とイギリス、アメリカの新批評の生長との総括的

事件等は文学作品にとって extrinsic な方位をもつものであるが、それはただ作品評価の Kriterium にならないという意味で区別されたのであった。音楽や絵画の場合、民族、時代という壁を取り除くことは比較的容易だろう。しかし文学作品は、それ自体すでに民族的、歴史的所産である言語をそのマテリアルにしなければならず、そこに作品研究から一方的に extrinsic な要素を排除することのできない理由がある。そのためにも、『文学の理論』の最終章で文学史研究の重要性が説かれていたのである。それにもかかわらず、アメリカ批評界を見ていると、頑なに作品研究に extrinsic な要素を持ちこむことに反対し、作品のディテールに精密な考察を極めるといふ傾向が強い。

ウエレクはこうした状況をふりかえって、自著に対する誤解をとくために、またさまざまな文学理論の一面的傾向を是正し、その拡散的傾向に統一的照明を与えるために、文学の理論を一層精度の高いものに完成しようとしている。それが『文学理論』の発表以後の彼の一貫した仕事だったと言えよう。

本書は、その過程で生れた十四の論文をステファン・G・ニコルズが編集し、それに緒言を附した論文集である。ウエレクの生誕六〇年（一九六二）を記念した出版であることがその緒言からうかがわれる。巻末にはウエレクのビブリオグラフィが附されている。論文の題目は次のとおりである（配列順）。「文学理論、批評、そして歴史」「文芸批評の用語と概念」「文学史における進化の概念」「二〇世紀の批評における形式と構造の概念」「文芸学におけるバロックの概念」「上記論文につけ加えられた一九六二年のあとがき」「文学史におけるロマン主義の概念」「ロマン主義再論」「文芸学におけるレアリズムの概念」「最近のヨーロッパ文芸学における実証主義への反逆」「比較文学の危機」「アメリカ文芸学」「哲学と戦後アメリカにおける批評」「二〇世紀批評の主な動向」。

個々の論文に対する検討はここでさし控えねばならない。ここでは本書全体に冠せられている「批評の概念」についてのウエレクの見解を紹介しておこう。

一般にわれわれが「批評」という語を思い

浮べるとき、この語があまりに多義的に用いられていることに当惑する。一方では主観主義的批評、印象批評があるかと思えば、他方では客観主義的批評が主張される。また批評の機能の中に価値評価の契機を導入する者もいれば、他方に没評価的認識でもって批評を遂行しようとする者がいる。またその対象面について見ても、批評を芸術批評、文芸批評に限って用いている者もいれば、人間の生現象全体に関係づける者もいる。最後に、文学理論すなわち体系的文学原論を文芸批評とする者もいれば、文芸批評をただその時々々の時評に局限しようとする者もいる。こうした用語の混乱は、人それぞれの思想態度にも関係していて、にわかにはこれをよしとすることはできない。しかしそれは「批評」という用語が概念の不明確なままに使用されてきたという事実にもよるのである。「批評」の概念を確立するためにウエレクを選んだ道は、批評の原理の体系化としての文学理論を建設する道と批評の用語法を史的に検討してゆく道である。前者の里程標が『文学の理論』だとすれば、後者の研究は『近代批評の歴史一七五〇—一九五〇』（一九五五）に結実する。

## 書 評

文学理論は文芸作品の本質と機能を対象とする。批評は文学理論によって獲得された作品の本質、機能を *Kriteria* として活動を遂行するものである。「批評は判別、判断であり、そのために基準、原理、概念を適用し包含することになる」(P. 316)。文学作品の本質とは、イメージとのエウフォニーといった単一的性質に還元されるのではなく、むしろこうした諸性質の有機的結合や機能に求められねばならない。文学作品はポリフォニカルな構成体とみなされる。そうした作品の統一原理として、たとえばロシヤ形式主義では意匠 (*Prjem*) という概念が案出された。彼らはこの概念を *Kriterium* として作品を批評した。しかし批評には文学理論に還元しきれない独自の機能がある。ウエレクは両者の相異を次のように定式化している。「理論は(作品の)原理・カテゴリー・意匠などに関係するが、批評は具体的文学作品を論究することである」(P. 36)。すなわち、批評はその対象の具体性において区別される。文学理論は作品一般を仮想するために、作品それぞれのもっているヴァリエーションを直視することが少ないが、批評にあっては個々の具体的作

品の統一をそれぞれのヴァリエーションの中で把えねばならなくなる。批評はこうした事態に対して柔軟性と弾力性をもたねばならない。

しかし『文学の理論』でウエレクがインガルドンやカイザーの多層構造論にくらべて最も強調していたのは、理論の根底に価値評価の契機を置くことであった。本書でも「芸術作品は、その構造に附着するのではなく、作品の本質そのものを構成する価値の総体性である」(P. 68)と言われている。したがって、それに続けて「文学作品から価値を排除しようとするどんな試みも、文学作品の本質そのものが価値であるために失敗してきたし、今後も失敗するであろう」(P. 68)と断定される。文学の理論が価値の体系化だとすれば、批評は「価値の判断」(P. 68)である。

われわれはここで『文学の理論』(第十八章)で詳述された *value* と *evaluate* の区別を想起する必要がある。*value* は *interest* の意であり、*evaluate* は *judge* の意である。その区別は次の表現から明瞭になる。「歴史を一貫して人類は、口誦のものであれ印刷されたものであれ文学を *value* し、

それに興味を示し、それに積極的価値を与えてきた。しかし文学、あるいは特殊な文芸作品を evaluate した批評家や哲学者は、否定的判定に達するかもしれない。とにかく、われわれは interest の経験から judgement の経験へと経過する。norm へ関係づけることによって、kriteria を適用することによって、またそれを他の対象や、interests と比較することによって、われわれはその対象や interest の順位を測定するのである」。また「われわれは文芸作品をそのあるがままの姿のままに value すべきである。一方われわれはその文学的 value の条件と程度においてそれを evaluate すべきである」。これらの表現から明かなように批評は evaluation にその本質をもつ。「狭義の文芸批評は、具体的文学作品を evaluation に重点を置いて研究することである」(P. 35)。ついでながら、ここからウエレクの比較文学研究への関心も明かになるだろう。

本来、criticism とはギリシャ語の krin-ein (判断する)に語源をもち、また紀元前四世紀フィリタスは kritikos を「文学の判断」という意で用いている。この kritikos は grammatikos から区別されていて、後者は本文解釈を意味していた。そして前者は後者よりも高次の用語として用いられてきたのである。「明かに解釈の適合性の概念は判断の正確さの概念へと進む。evaluation は理解から成長する。だから正確な evaluation は正確な理解から成長する」(P. 18)。批評はこの grammatikos から区別された kritikos の本来の意義を継承すべきである。それと同時に、現代ドイツにおいては、Literaturwissenschaft に対立させて、単に up-to-date な時評のために Literaturkritik という名称をあてているが、これは文芸批評の位置を貶めるものであって、前者に基いた批評概念が確立されるべきである。

以上が、ウエレクによってなされた大体の批評概念である。彼は本書に収録された各論文によってそれぞれ異った角度から批評概念の確立を志向していて、その収斂の方向は明快である。しかし、個々の論文は比較的短いせいもあって、われわれを満足させるほどの充分な自説の展開を欠いている。たとえば批評概念そのものに肉薄することをテーマにした第二論文もギリシャ以来の批評概念の変遷にほとんどの紙数を費してしまっている。現代ドイツにおける文学研究の世界では、たしかに「文芸批評」の語は時評へと貶められているくらいがあるが、そのかわりに解釈 (Interpretation) がウエレクの使用する単なる文法的地平の意味を超えたものとして使用されている。そしてこの解釈をめぐって、一方では文芸学者の多くが文学作品の総体という特殊世界の中で個別作品を位置づけ、そのようにして作品の个性的様式を発見しようとするに對し、他方では特にハイデガーの実存哲学の影響下にある文芸研究者は、作品の言葉に最大限の信頼を寄せつつも、現象した言葉の世界を超えた新しい世界を発見しようとする。この対立はドイツ文芸学界においては実存哲学からの訣別というかたちで五〇年代初期に一応解決したように見えるが、それが実存哲学を「主観主義的」(ルンディング)「哲学者の批評」(シュタイガー)というかたちで排斥したのであるとすれば、事態の本質にそった解決にはなっていない。これにウエレクはどう応えるか。またウエレクの批評概念の本質である

evaluation は他の作品との比較によって問題になってくる。当の作品に順位を与えることであるが、比較は同一質における異った量の間で可能となる方法である。文学作品はたしかに文芸という同一地平に位置づけられるが、一つの文学作品と他の文学作品あるいは規範的作品の間には単なる量的ヴァリエーション以上の差異がある。これをも比較によって明かにすることができるとすれば、その比較はいかなるものでなければならぬか。そしてもっと決定的なことであるが、われわれが文学作品によせる value は比較操作を主とする evaluation へと一方向に進むものなのか。

それらの問いにウェレクは充分な説得力を發揮してはいない。それはむしろわれわれに残された問いであろう。

だが、本書はむしろ他の方面においてわれわれに有益である。というのは、本書が戦後のドイツ文芸学が摂取しようとし、日本の文学研究も戦後その意義を認めるようになったアメリカにおける文学研究の全体的な姿を示しているからである。われわれには新批評の

活動とその周辺の知識がかなりの程度供給されている。しかしながら新批評をその一部分としたアメリカ批評界の動向には十分な知識があるとは思えない。またウェレク自体も語っているように、アメリカの文芸批評界のヨーロッパ的伝統との関係も不明瞭である。ウェレクはヨーロッパの哲学の文芸批評への影響というシエーマでアメリカ批評界の略図を手ぎわよく描いてみせる。

最後に補足的につけ加えておくが、これまでに *Literaturwissenschaft* の命名者はムントということになっていたが、それは事実の誤りで、本当は K・ローゼンクランツだということが証明されている。この事実考証は文芸学の本質に関わるものではないが、ウェレクが従来の定説をうのみにするのではなく、極めて慎重に批評の問題にとり組んでいるということを示す一端ともなれば幸せである。

(金田 晋)

## 書 評